

## まえがき

昭和十九年十月二十五日、五機の爆装零戦によって編成された第一次神風特別攻撃隊敷島隊が、レイテ沖で護衛空母一隻撃沈、同一隻大破という大戦果をあげて以後、特攻攻撃は陸海軍それぞれで、組織的、計画的に敢行されるようになり、通常攻撃では期待できぬほどの戦果をあげました。

そして昭和二十年四月一日にアメリカ軍が沖繩に上陸すると、同六日には日本陸海軍の協同による航空総攻撃「菊水一号作戦」が発動され、初期の神風特攻とは比較にならぬほど大規模な特攻が展開されました。ちなみに四月六日に出撃した日本軍航空機は総数五百二十四機で、そのうち特攻機は三百三機でした。

この菊水作戦は沖繩が陥落する六月二十一日まで十回発動されましたが、それ以後も小規模ながら特攻は続行されて、終戦の日の八月十五日まで続きました。いわば特攻は戦争末期に日本軍が展開した唯一の積極戦略であり、戦後、米国戦略爆撃調査団も、「カミカゼは第二次大戦中に日本の開発した最も有効な兵器であった」と報告しています。

太平洋で日本陸海軍機と直接戦った連合軍将兵は神風特攻、即ちカミカゼ・アタックを何よりも恐れました。たとえばロベール・ギランというフランス人特派員は『日本人と戦争』という自著の中で、「カミカゼ・アタックによるアメリカ海軍の被害は、昭和十九年

十月二十五日から終戦の日まで、撃沈が空母三隻を含む三十五隻で、損傷は二百八十五隻にも及び、その中には空母三十六隻、戦艦十五隻、巡洋艦十五隻、駆逐艦八十七隻を含む」と記しています。カミカゼ・アタックは凄まじい被害をアメリカ海軍艦船に与えたといえます。

そこで常に問題にされるのはカミカゼの命中率ですが、一般にカミカゼは目標艦船に到着する前に敵の迎撃機によって半数が撃墜されるとされています。さらに敵上空に達しても、高射砲弾が目標機の近くを擦過するだけで爆発する近接信管付砲弾によるレーダー射撃でまた半数が撃墜され、さらに最後の突入時に敵艦から射ち上げる猛烈な弾幕によってその半数が撃墜されるといえます。この割合によると最終的な命中率は一二・五%ということになります。

具体的な数字をあげてみますと、『神風特攻隊』の著書があるA・J・バーカーは、菊水作戦が発動された四月六日から六月二十二日までの間に千四百六十五機のカミカゼが出撃し、カミカゼの命中により連合軍艦船の二十六隻が沈没、百六十四隻が損害を受けたとしており、命中率は一二・九七%となり、計算上の命中率とほとんど同じです。

またこの命中率で考慮しなければならないことは、アメリカ軍のカミカゼ対策がまだ確立していなかったフィリピン決戦時は命中率高く、それが確立した沖繩決戦時は命中率が低下したという点です。たとえばアルバート・ノーフィとジェイムズ・ダニガン共著の『第二次世界大戦』によれば、昭和十九年十月二十四日から翌年一月三十一日までのフィ

リピン決戦で、日本軍は三百七十八機の特攻機を失いましたが、連合軍艦船十六隻を沈め、八十七隻に損害を与えたとされています。これによれば命中率は二七・二四%となり、標準計算の二倍になります。

そして沖繩決戦になると連合軍側のカミカゼ対策は極めて効果的となり、昭和二十年三月十八日から六月二十日までに日本軍は二千五百機の航空機を失ない、連合軍側は十三隻を沈められ、百七十四隻に損害を受けたとされ、この日本軍の二千五百機がすべて特攻機であるかどうかは確認できないのですが、すべてそうだとすると、命中率は七・四八%に低下します。

このようにフィリピン決戦の時に二七・二四%であった命中率は、沖繩決戦では七・四八%まで落ちたのですが、出撃機数が沖繩決戦ではフィリピン決戦の六・六倍にも及んだため、連合軍側の損害は沈没、損傷ともに大幅に増えたわけです。

また同書では特攻攻撃が展開された昭和十九年十月から昭和二十年八月までの特攻機喪失を三千九百機とし、連合国軍側艦艇の沈没を八十三隻、損傷を三百五十隻と見ていますから、命中率は一一・一%ということになり、これも標準計算の一二・五%に近い数字となります。ちなみにこの沈没八十三隻の内訳は、護衛空母三隻、駆逐艦十三隻、護衛駆逐艦一隻、掃海艇二隻、その他六十四隻となっており、その他の中には上陸用舟艇や物資輸送船等の小艦艇が含まれます。

きな戦果をあげたわけで、アメリカ海軍の公式記録では、損傷艦艇の約七七%、海軍将兵死傷の約八〇%がカミカゼ・アタックによる被害とされており、アメリカ海軍将兵にとつて最強の敵がカミカゼであったことは間違ひありません。

本書にはタイトル通り、外国人がカミカゼをどう見たかが様々な角度から記されています。外国人がカミカゼの実相を知ることとは、カミカゼが日本の歴史と文化と伝統の必然的な産物である以上、それは日本人の本質を知ることには外ならず、本書はカミカゼを通して見た極めてユニークな外国人による日本人論ともいえるのです。

なお外国人は特攻隊や特攻隊員、あるいは特攻攻撃を一緒にたにしてカミカゼと呼んでいます。日本軍の特攻部隊を分類すると、まず航空特攻と海上特攻、水中特攻に大別できます。

航空特攻のうち、海軍特攻は神風特攻と桜花特攻に分けられ、桜花特攻は人間ロケット桜花とその母機一式陸攻とその援護戦闘機からなる特攻隊です。神風特攻はいうまでもなく特攻隊の主力で、一般には神風と読まれ、外国人もこれにならって各種特攻を区別なくカミカゼと呼んだわけです。

また神風特攻隊には様々な詩的な隊名がつけられています。第一次神風特攻隊敷島隊の場合は、国学者本居宣長の名歌「敷島の大和心を人間は、朝日に匂ふ山桜花」から採られ、同時にこの和歌から他に大和隊、朝日隊、山桜隊の三隊も編成されました。

陸軍特攻の場合は、フィリピン決戦期には富嶽隊、万朶隊といった勇壮な隊名がつけら

れたのですが、沖縄決戦期には九州の各基地から出撃する部隊は第〇〇振武隊と命名され、台湾の基地から出撃する部隊には誠第〇〇飛行隊と命名されるのが常でした。

また陸軍特攻で忘れてはならぬのは空挺部隊で、義烈空挺隊、薫空挺隊、高千穂降下部隊がありました。この部隊の特徴は、輸送機で敵基地に強行着陸して肉弾突撃したり、落下傘等で敵陣内に降下して敵軍を攪乱するという決死の部隊でした。

海上特攻としては、沖縄決戦時の戦艦大和以下の第二艦隊の特攻が有名ですが、他に爆装ボートによる特攻は海軍では震洋、陸軍では①艇（連絡艇の頭文字）の部隊が編成され、フィリピン決戦、沖縄決戦で出動しました。

水中特攻は人間魚雷回天が有名で、菊水隊、金剛隊等九隊が編成され、神風特別攻撃隊に対して神潮特別攻撃隊と呼ばれました。

以上が航空、海上、水中各特攻隊の概要ですが、このうち航空特攻を総称して外国人はカミカゼと呼び、当然その中には海軍の神風特攻隊ばかりでなく、陸軍特攻隊も含まれました。

そこでこのカミカゼの年齢構成ですが、もっとも若いクラスで十七歳ですが、主力は十八、九歳と、二十二、三歳といわれています。前者は海軍ですと予科練出身者、陸軍ですと少年航空兵出身者が主力で、後者は学徒出陣組で編成され、海軍ですと飛行予備学生、陸軍ですと特別操縦見習士官が主力でした。

また防衛省の記録では、特攻隊の戦死者は、海軍が二千五百二十五人、陸軍が千四百四

人、計三千九百二十九人となっています。他に旧陸海軍の記録では、海軍が二千六百三十一人、陸軍が千七百四十八人、計四千三百七十九人となっており、さらに東京・世田谷の観音院にある特攻観音堂には、海軍二千六百三十柱、陸軍千九百八十五柱、計四千六百十五柱の御霊みたまが祀られています。

特攻とは何であったのか、それは戦後常に提起されつづけてきた問題ですが、外国人が特攻をどのように把握し、認識しているかを知ることが特攻の本質に迫る極めて有効な方法といえます。外国人の多くは特攻自体を狂気の沙汰と断定しますが、特攻隊員の並外れた勇氣と自己犠牲の崇高な精神には深い共感を示しました。たとえば『神風』の著書を持つベルナル・ミローは、特攻という「戦術的自殺行動」などは容認できないとしつつ、「しかしまた、日本のこれらの特攻志願者の人間に、無感動のままに、無感動のままにいても到底できないのである。彼らを活気づけていた論理がどうであれ、彼らの勇氣、決意、自己犠牲には、感嘆を禁じ得ないし、また禁すべきではない。彼らは人間というものがある」<sup>1</sup>のようであり得ることの可能なことを、はつきりと我々に示してくれているのである」と断言しました。男子は危地に立った時、はじめてその真価が分かるとされていますが、特攻隊員の真情を知ることとは、危地に立った時に彼らが示した日本人としての見事さを知ることには外ならないのです。